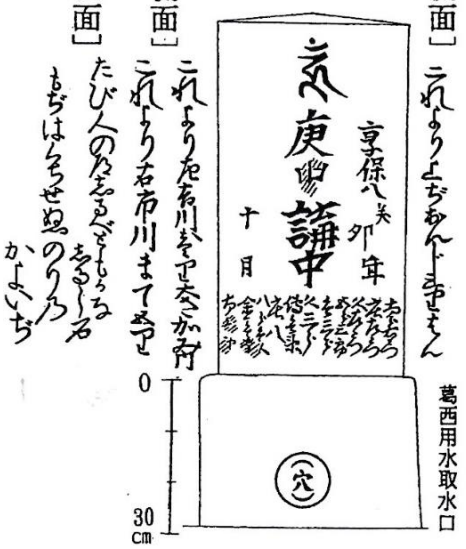
越谷に残る「道しるべ」ベストテン（元荒川南側編）

加藤　幸一

道しるべ（道標）は、江戸時代の人々にとって欠くことのできない情報であった。他所との往来がますます盛んになるにつれて、その重要性が増していったものと考えられる。

市内の石仏悉皆調査でわかったことは、元荒川南側地域では道標石塔は十基、道標付き石仏石塔は二十二基、道標関係はあわせて三十二基存在する。その中で十基を紹介する。

1．道標付き文字庚申塔



享保8（1723）

［側面］これより上ぢおんじ三里はん

［側面］これより左吉川へ壱里大さかみ内

［側面］これより右市川まて五里

［裏面］たび人の道しるべともかな　しるし石
もぢはくちせぬのりの
かよいぢ

［左側面］
これより上ぢおんじ三里はん

［正面］
享保八癸卯年
庚申講中
十月

（梵字ウン）

太郎右衛門
庄左衛門
久左衛門
五郎三郎
兵三郎
久三郎
伝兵衛
庄八
八郎兵衛
金兵衛
太兵衛

※上＝上流の意味

［右側面］
これより左吉川へ壱里大さかみ内
これより右 市 川 ま て 五 里

［裏面］
たび人の道しるべともかな
もぢはくちせぬのりの
かよいぢ

※大さかみ＝大相模

これは道標を兼ねた庚申塔である。瓦曽根溜井の葛西用水の取水口付近の路傍に今も残る。正面には、地元の人々が庚申信仰のために組織した講中（グループ）として造立したことが示されている。

両方の側面にはそれぞれに道標が刻まれている。元荒川の下流にある大相模の不動尊や吉川、元荒川の上流にある慈恩寺（現岩槻区）、遠くは下総国の市川（現市川市）との人々の交流が見られていたのであろう。

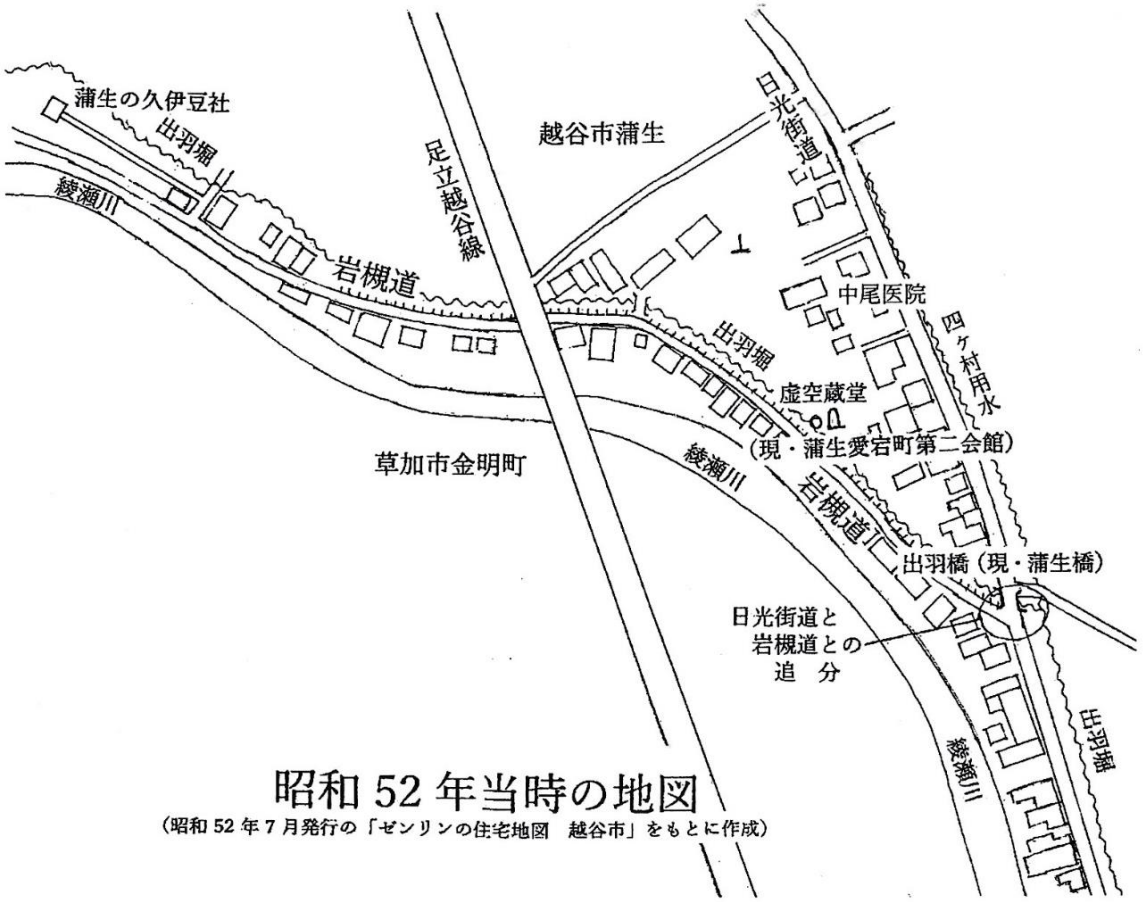
人々は、ここから市川へ行く道筋を葛西用水路に沿って南下し、その後日光街道の現在の千住五丁目から来る水戸佐原道を利用したと推定できる。裏面に、旅人にあてた歌が刻まれている。

2. 観音像付き『慈恩寺』道標石塔

延宝5（1677）

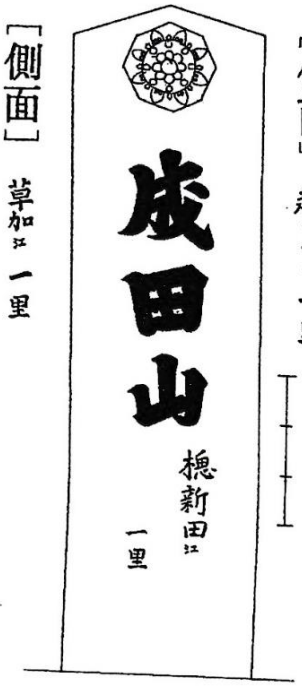
［正面］　［　台　石　］
観音□□（菩薩カ）
（観音菩薩像）これよりぢおんじみち
寛保四甲子　四里
正月二十三日

この道標は岩槻道沿いにある虚空蔵堂、現在の蒲生愛宕町第二会館に安置されている。もとは日光海道（街道）を通る旅人や巡礼者にわかるように、日光街道と岩槻道の追分（「出羽橋」現在の蒲生橋そば）にあったと推定される。道標石塔の上には慈恩寺の観音像が置かれている。この観音像は、慈恩寺の観音様へ行く道標とわかる目印となっている。道標石塔には「これよりぢおんじみち（慈恩寺道）四里」と刻まれている。慈恩寺道は後の岩槻道のことである。道標の側面に「施主四百三十人」と刻まれていて、多くの人々が慈恩寺の観音信仰に関わっていたことが裏付けられる。



昭和52年当時の地図
（昭和52年7月発行の「ゼンリンの住宅地図　越谷市」をもとに作成）

3. 成田山道標石塔



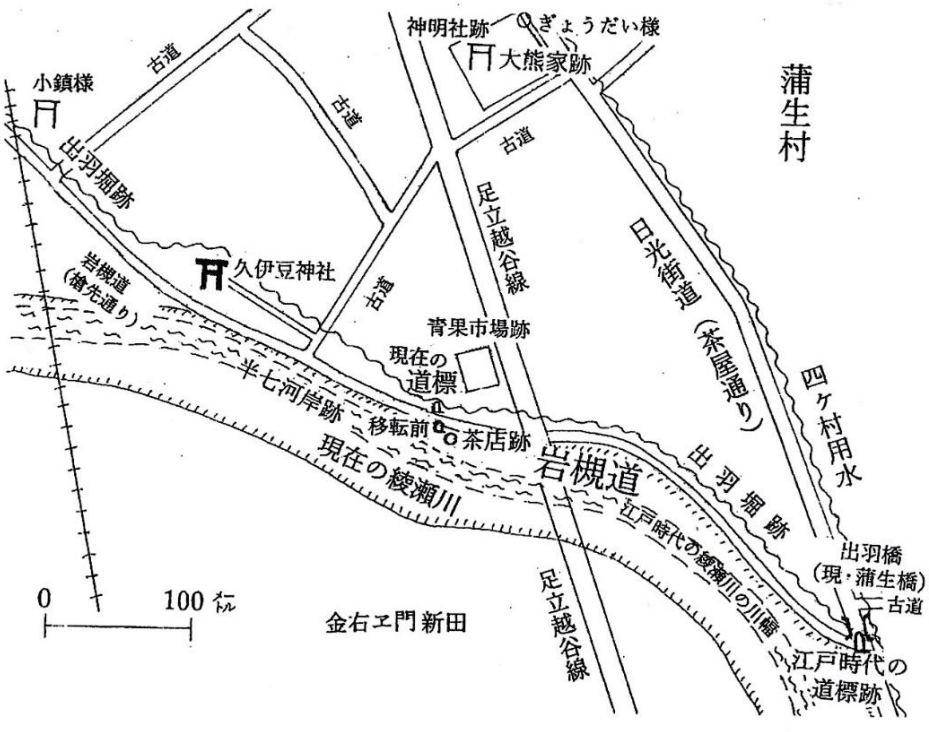
元治２（１８６５）

「成田山新勝寺」のために造立された石塔で、日光街道の越ヶ谷宿や草加宿、綾瀬川沿いの岩槻道の槐新田（現在の新川町にあった越巻村か）の道標を兼ねている。

槐新田とは、七左衛門新田のことであり、この石塔に刻まれた「槐新田」は、その内の槐新田の隅にある越巻村（新川町）あたりのみを示すと思われる。

この道標は、現在の綾瀬川沿いの蒲生一丁目八番地あたりの槍先通りの北側路傍に現存するが、かつては道路南側の駒崎茶店前路傍にあった。幕末に造立されたこの道しるべは、本来は駒崎茶店の前ではなく、ここから南東方面にある蒲生愛宕町の蒲生橋（旧称、出羽橋）そばの日光街道と岩槻道との追分にあったと考えられる。この道標により北方一里先の越ヶ谷宿、南方一里先の草加宿、岩槻道へと進んで一里先の「槐新田」（現在の新川町）に到達できた。

なお、蒲生村の名主である大熊家（他所に移転）から来る道の突き当たりの元荒川沿いには、かつて「半七河岸」（浅見家差配）が見られた。この半七河岸は、大熊家も船運などに活用していたのであろう。



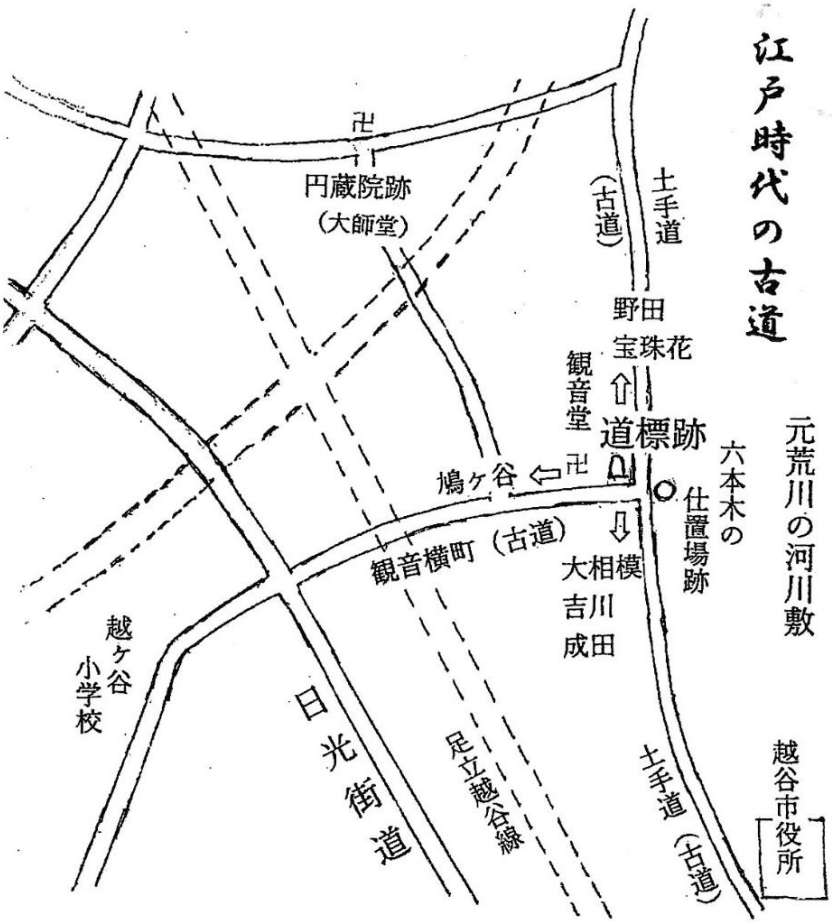
4．道標付き文字庚申塔

寛延元（1800）

[左側面]
此方 のた 道 ほうしゆはな
[正面]
寛延元庚申歳十一月建之
（日月）庚申塔（三猿）
[台石]
[右側面]
此方 大さがみ よし川 なりた 道
※大相模 ※吉川 ※成田
[裏面]
此方 はとがや かわくち 道
[台石]
□□□
※鳩ケ谷 ※川口
※野田 ※宝珠花

正面に「庚申塔」と刻まれている石塔は江戸時代のもので、現在の越ヶ谷中町八の二〇の箕輪家邸内に保管されている。現在の越谷市役所（元は河川敷）の西側にある久伊豆通り（土手道・日光海道（街道）ができる江戸時代より前から存在する古道）の北百八十メートル先に俗称「六本木」と呼ばれた江戸時代のお仕置き場（刑場）跡があった。そのあたりにこの道標があったと思われる。

この道標の西方面は、観音横町を通って日光街道を横断すると赤山道（鳩ヶ谷道）に入る。また、南方面は大相模の不動尊（大聖寺）や遠くは成田山新勝寺に、北方面は久伊豆社の東側沿いの道を進み、野田や宝珠花に通じる。旅人にとっては貴重な道標であった。



5. 道標付き猿田彦文字庚申塔

文化4（1807）

于時文化四丁卯歳六月大吉日　荻嶋村願主　会田秀蔵

[正面]
猿田彦大神

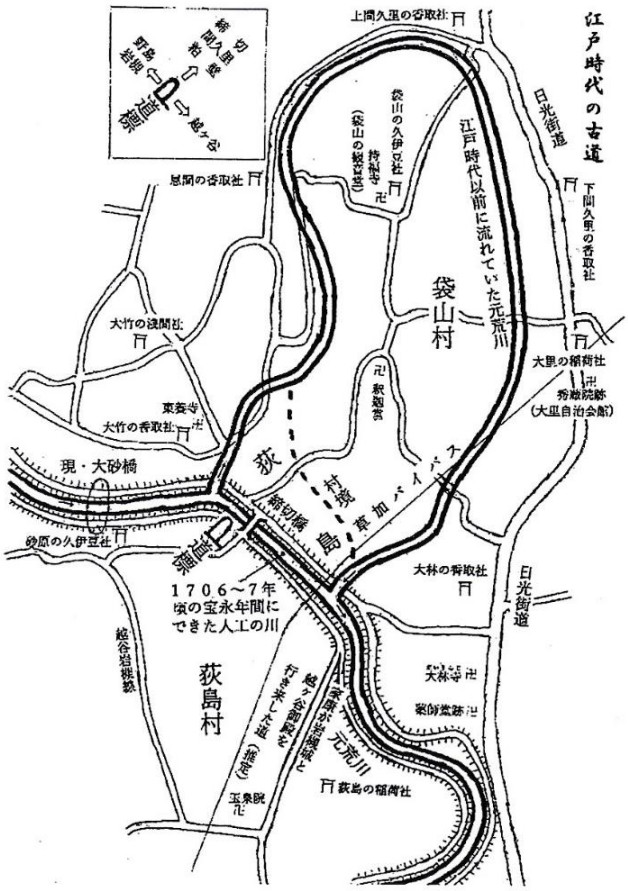
[右側面]
講中世話人　嶋村□右ヱ門
同　同　同

東　しめきり　まくり　かすかへ
南　こしかや
北　のしま　いわつき

天嶽寺入口の道路に面した所に多くの庚申塔が見られる庚申塚がある。その中で「猿田彦」と書かれた道標を兼ねた神道系の庚申塔が見られる。

この庚申塔はもともとここにあったのではなく、「しめきり」という文字やこの石塔を造立した荻島村名主と思われる会田秀蔵の名前が刻まれていることから、天嶽寺から遠く離れた荻島村の締切橋近くにあったものと思われる。

この道標は、締切橋の南詰めに南向きに置かれていたと推定される。橋を渡れば対岸の「締切」と呼ばれる集落や袋山村の中央を通り、上・下の間久里、粕壁宿に通じる。元荒川の土手道を下流に向けて進めば南方（正確には南南東）にある越ヶ谷宿に通じ、一方民家のある古道ではなく、元荒川の土手道を上流に向けて進めば北方（正確には北西）にある野島や岩槻に通じる。「締切」の呼称は、もともと袋山村の周りを迂回して流れていた元荒川を廃川にするため、新たに荻島村の中に東西にまっすぐに流れる川を作って荻島村を南北に分断し、袋山村の周りを流れていた元荒川に流れないように締切ったことに由来する。



6．道標付き不動明王像

文久4（1864）

[左側面]
（歳次か）
文久四□次甲子正月
向 こしかや 廿丁
よし川 二り
[右側面]
右 □ 一り半余
此方向
左 はとかや 二里
大もん 一り余
いわつき 三里

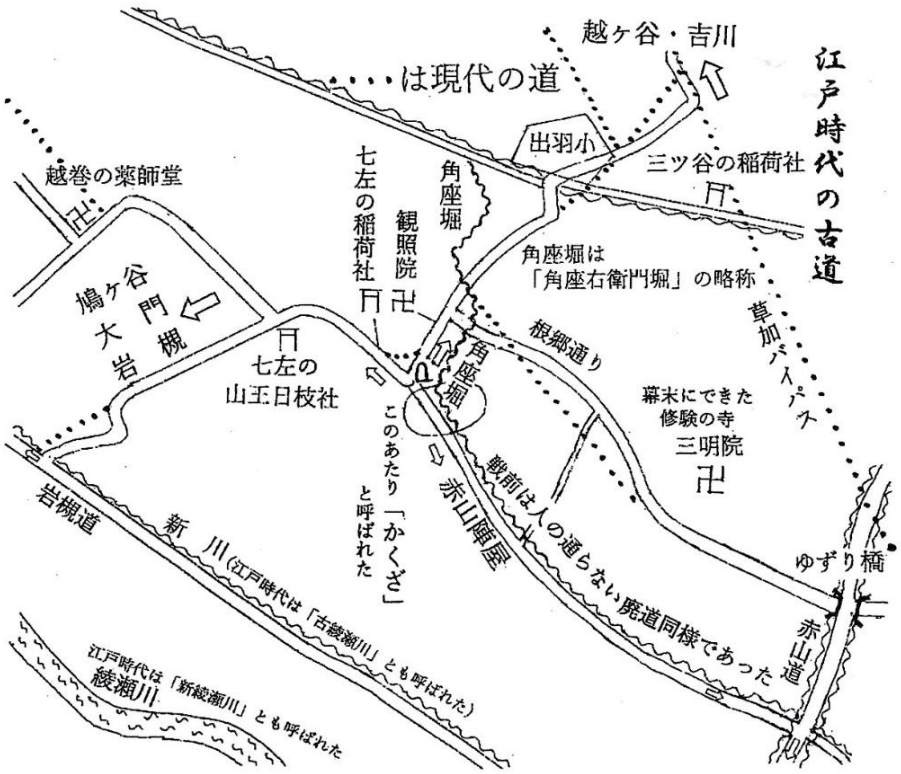
埼玉郡七佐衛門村
先達 源明院
八郎左ヱ門
□（興か）右衛門

※源明院は野口八郎左ヱ門家の院号。

観照院では、不動明王像の胎内から小さな不動明王像と「観照院本尊」と書かれた経木を発見したことから、本尊は阿弥陀ではなく、不動明王像であると断定している。

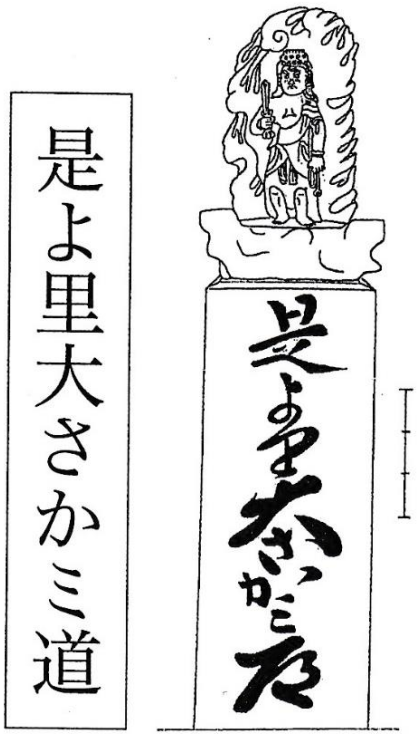
この道標に成田山新勝寺の不動明王が刻まれている。江戸時代は不動信仰で栄えた寺院であり、地元でも成田山の不動信仰とともに信仰が盛んであった。この道標は、観照院の前の直角の道なりをした道路（今は半円のカーブ）の路傍に設置されていたものを観照院参道に移転したものである。

ここから北東に進むと道標に書かれた越ヶ谷、吉川へ通じる。南東に進むと、赤山道に合流し、赤山陣屋へ、西に進むと岩槻道に合流し、鳩ヶ谷、大門（だいもん）、岩槻へ通じる。



※「ゆずり橋」の伝説については「中川水系総合調査報告書２」参照。

7．不動像付き『大相模道』道標石塔



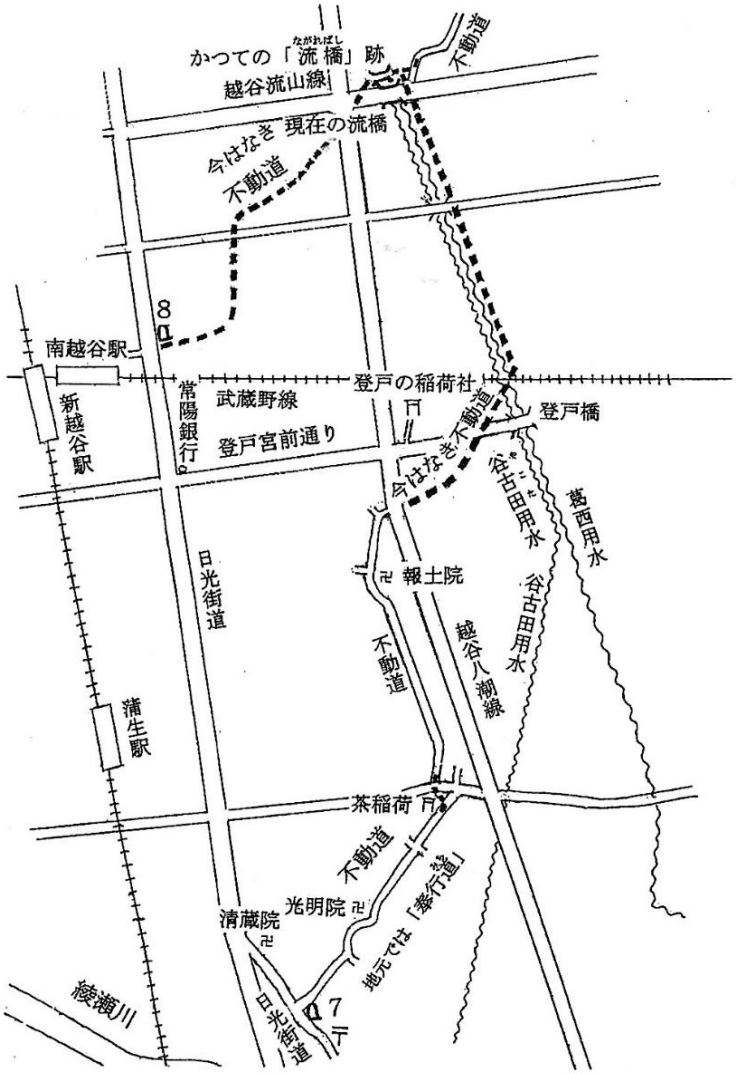
是より里大さかミ道

蒲生の茶屋通りに、そこから始まる不動道を示した「是より大さかミ（大相模）道」と刻まれた道標がある。

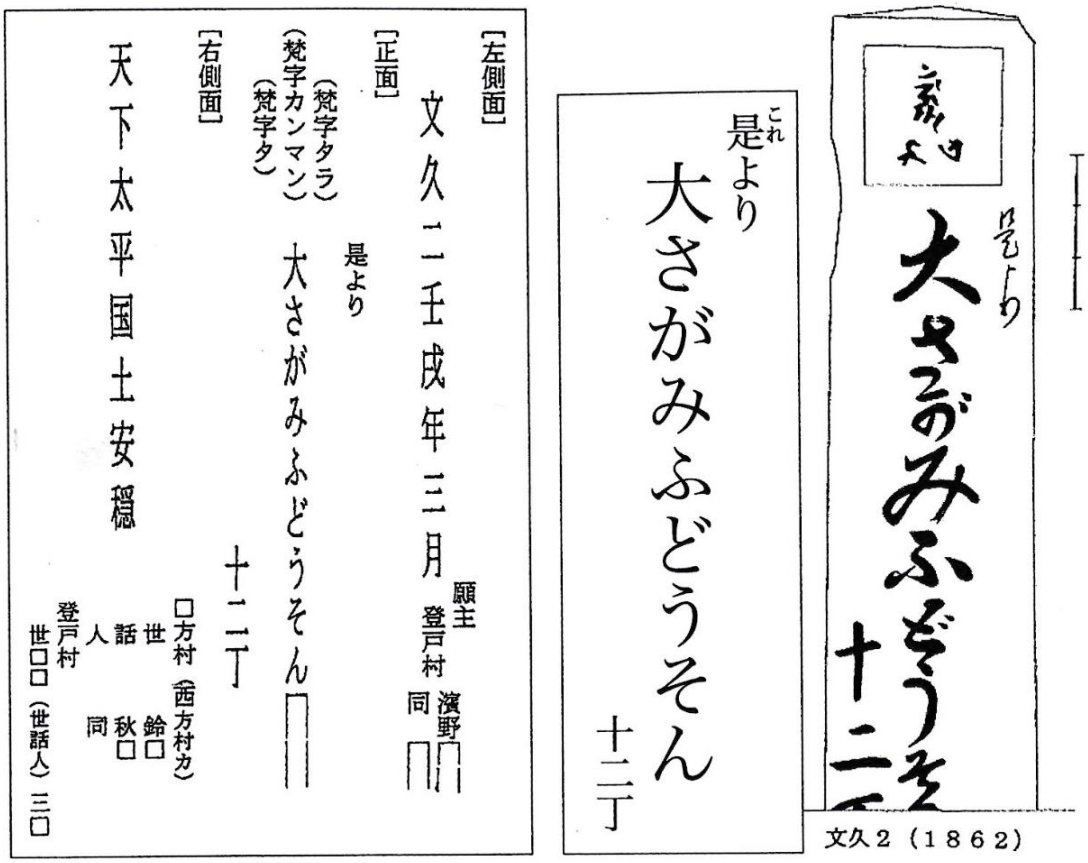
江戸の新乗物町講中（現在の日本橋掘留町一丁目）の人たちによって造立されたものである。

この地点（地図中7．）から不動道が始まっている。道なりに行くと蒲生の光明院の前、さらに北進すると県道（柿ノ木町・蒲生線）に突き当たるが、その少し手前で「茶稲荷」と呼ばれている稲荷社の西側を通り（現在、その道の名残として、小さな排水路のみがある）、現在の県道を横断し、道なりに北上して登戸の報土院の前を通って北に進む。そして登戸宮前通りの手前の越谷八潮線あたりから葛西用水に架かる西方村の流橋までの不動道は、残念ながら失われている。失われた不動道は、登戸の稲荷神社の東側を通り、葛西用水の左岸沿いに北進して流橋に至ったと推定できる。

旧・流橋から不動尊までの不動道は今も残っている。ここで言う旧・流橋は、現在の流橋の十メートル上流の人が通れる程の橋をさす。この橋は、通行禁止となって残されていたが、現在は撤去されている。



8．『不動尊』道標石塔



この不動道の道標は、江戸時代に西方村（にしかた）と登戸（のぼりと）村の人たちによって建てられたものである。地元の古老はこの「不動石（いし）」は登戸宮前通りと日光街道が交わった角地の南側にあったことを覚えており、その後、向かい側の常陽銀行側の角地に移り、最終的には平成十六年に現在の場所、東門の外へ移転し今に至っている。

しかし、江戸時代の本来の設置場所は、日光街道沿いの登戸村の北のはずれの三軒茶屋（現在の南越谷駅周辺）にあったと考えられ、その場所は現在の南越谷駅北東の日光街道の東側路傍である（前頁の地図中の8．の場所）。そこが日光街道の三軒茶屋から不動尊へ通じる入口であったのである。

この不動道は、西方村の旧・流橋（ながればし）（現在の流橋のすぐ上流に架かる使用禁止の橋、その後撤去）まで続いていたが、その道は田圃の中を通っていて、開発によりすべて失われ、現在はその名残すら全くない。

9．不動像付き『大相模道』道標石塔

寛保元（1741）

是より里大さかミ道

この不動道の道標は、越ヶ谷一丁目（越ヶ谷新町）の栃木銀行越谷支店の南東側の日光街道沿いにあるが、江戸の新乗物町講中の人々によって造立されたものである。新乗物町とは、現在の日本橋掘留町一丁目あたりにあり、乗物（武家が乗る高級な駕籠）、つまり武家対象の駕籠屋が多かったことから名づけられた町名である。蒲生の茶屋通りの奉行地道入口にある不動道の道標も同じ講中によって造立されている。越ヶ谷新町の不動付き道標は茶屋通りのものと同じで、特に「是より大さがみ道」の字体が一致している。

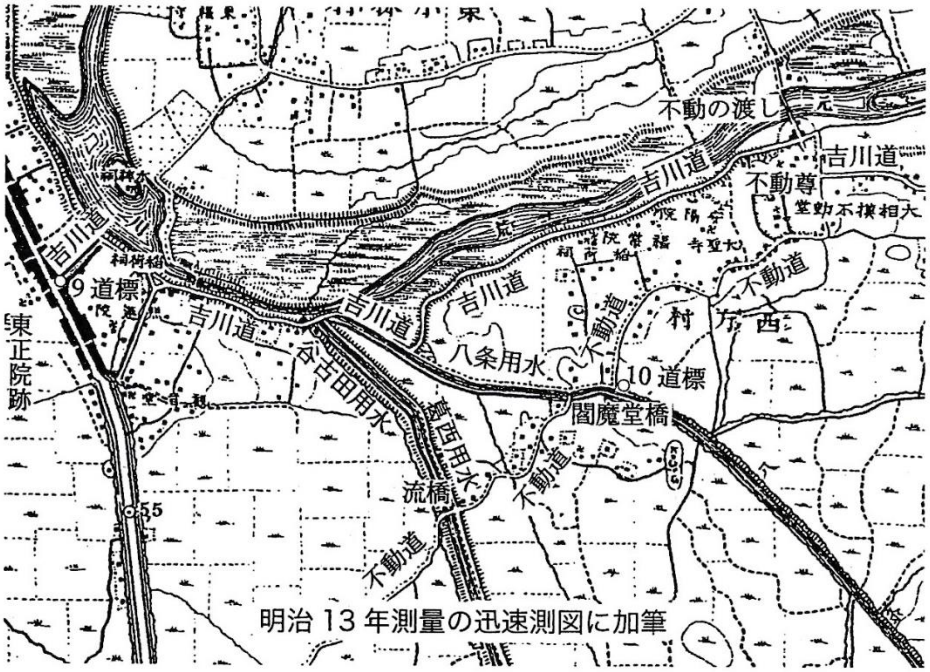
江戸時代の設置場所は、日光街道と吉川道が交わる角地にあった。現在は日光街道から瓦曽根溜井よりに移動している。

不動への道はこの角地から溜井に向かって北東に進み、突き当たって右に進む吉川道が不動道とも呼ばれた。大相模不動尊通り（吉川県道）は大正五年にできた新道である。

10．不動明王像付き『不動尊道』道標

この「不動尊道」と書かれた道標は、八条用水に架かる馬頭橋のそばにある。前の9．で示された地図中の10．道標を参照願いたい。不動尊の参詣に流橋、閻魔堂橋を渡ってきた参拝客はここから左折して北に向かい、道なりに進むと、不動尊のそばの門前町を通って不動尊の総門をくぐり、本堂に到着する。

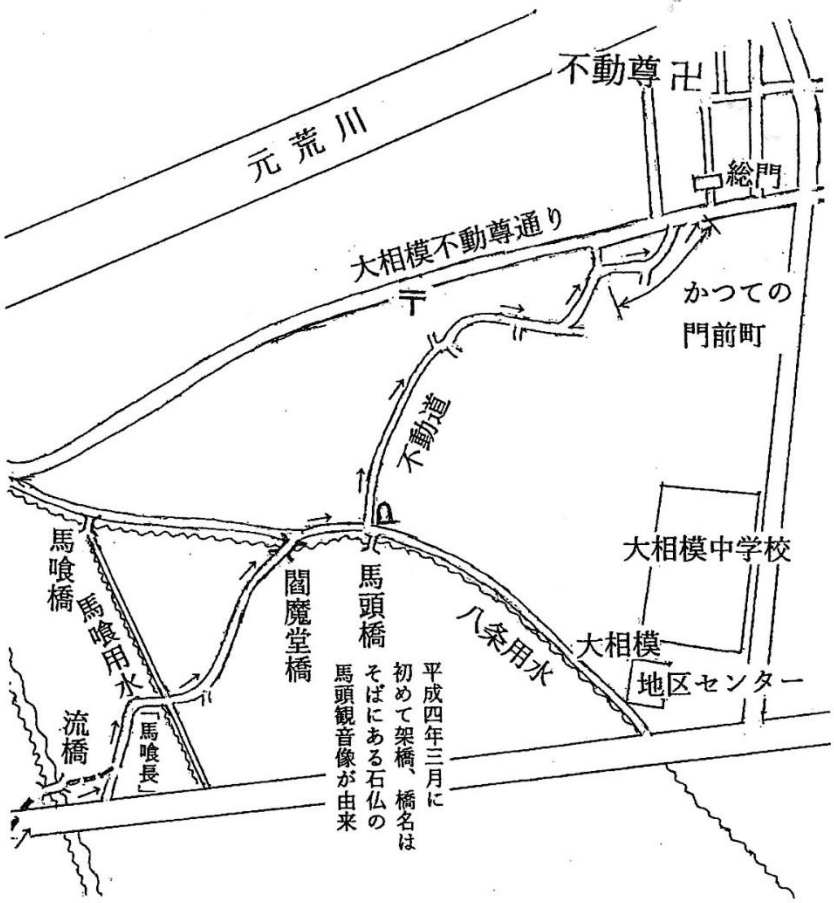
道標をみると、草加宿へは八条用水の下流方面に、越ヶ谷宿方面には上流に



明治13年測量の迅速測図に加筆

進む。不動尊へは左折を示している。

越谷市内の大相模の大聖寺の「不動尊」関係の道標は、道標の中でも最も多く見られる。参詣者が多方面からやってきたことを物語っている。

明和7（1770）

不動尊の道標に関する詳細は平成二十四年三月発行の「川のあるまち第三十号」六十七頁をご参照願いたい。